第14回金ケ崎町民劇場

白詰草の咲く頃に

1志賀醫院には連日多くの患者が訪れる（昭和時代）　2ミエは周りに医業から離れることを伝え、孫のかう子に自身のこれまでの人生を話し出す　3志賀家で和多利が医者ではなく、弁護士になることを告げ、英之進が反発する（明治時代）　4和多利がミエが医者になることを提案し、ミエは医者の道に進むことを決意する　5医塾済生学舎で門番に止められ、急に女子学生の出入り禁止になったことを告げられる　6和多利から親友の篠宮との結婚話を持ち掛けられ、夫婦となることを決めたミエ　7結婚して３か月後、篠宮は愛人といなくなってしまう　8篠宮が消えた後に子ども（美子）を授かったことを知ったミエは実家へ帰り、家族へ詫びる　9幼い美子を抱き、改めて医者を目指す決意をするミエ　10医療の勉強に専念するため、美子を家族へ預け、地元から離れる　11私塾学生診察室で患者にお金を渡して診察し、研鑽をつむ　12男女の価値観の差や苦学を克服し、ついに医療試験合格　13志賀醫院を開業後、なかなか患者が来なかったが、徐々に信頼をつかんでいく　14進駐軍の兵士に自分の敷地に無断駐車していることを抗議する（昭和時代）　15道端に生えている白詰草をみつけて、かう子が幼少期のころにつくってあげた花の冠を２人でつくり、かう子に被せてあげる

あらすじ

岩手県胆沢郡金ケ崎村《伊達藩》は大町家が治めていたが、明治維新で侍の世の中は終わりを告げる。大町家の家臣であった志賀家は、自分で商売をはじめるが失敗ばかり。とても貧しい暮らしを強いられていた。

そんな明治の世に誕生した志賀家４兄妹。父は教育熱心で、４兄妹全員を学校に通わせる。長女のキシは“お産婆さん„に、長男の和多利は父の反対を押し切って“弁護士„に、三女のシモは“小学校の先生„に、そして次女のミエは縫製学校の先生になるが、兄から言われるがまま半ば押しつけられ“医者„の道を目指すことに。困難の連続のなか、家族の支えを大きな希望に変えて、医者の道に進んでいく。苦労の末に医師免許をつかみ、ミエ姉妹は近くで暮らしたいという思いから、妹の住んでいた宇都宮に医院を開業したのだった。

－女医志賀ミエの開業するまでの物語とそれからの物語－

第14回金ケ崎町民劇場「白詰草の咲く頃に」は10月6日、中央生涯教育センターで上演されました。公演は午前、午後の2回行われ、町内外から約350人が来場。団員の熱のこもった演技に観客は魅了されました。

14回目を迎えた町民劇場。今年は土田きよみさんが初めて脚本に挑戦し、今年6月に亡くなった志賀かう子さんのエッセイ集「祖母、わたしの明治」を題材に、女の医者など考えられなかった明治時代に、女医としての道を切り拓いた金ケ崎出身の志賀ミエさんの半生を力強く描きあげました。

6月に旗揚げして以来、キャスト、スタッフが一丸となりこの日のために準備を重ねてきた本劇場。脚本、演出、大道具、小道具、音響、照明、衣装、化粧など多くの町民の参加があり、毎年手作りのものを使用しています。

当日は上演前から多くの観客が列をつくり、舞台を待ちわびちていました。

北上市から訪れた高岡由美子さんは「町民劇場は第1回から見ています。今回は地元をテーマにしているので、親しみを持ちながら観覧していました。来年もとても楽しみです」と嬉しそうに話しました。

Interview

かう子役　金野　菜々美（ななみ）さん

10年前に中学生で出演した際は、子どもで大人役をやって、今回は大人になって子役を担当しました。おばあちゃんのミエの大変さがまだ理解できない年齢だけど、気持ちに寄り添うことを意識して演技しました。

志賀ミエ役（明治時代）
土田　凪紗（なぎさ）さん

明治という時代で女性でありながら、女医の道を切り拓いたミエの強い意志を胸に、舞台に臨みました。

志賀ミエ役（昭和時代）
髙橋　香（かおり）さん

きびしくもやさしい、そしてたくましい志賀ミエを演じました。相手を気遣う姿勢を心掛けています。

脚本・助演出　土田　きよみさん

初めて脚本を手がけました。悩むところも多かったですが、多くの人の協力をもらい、皆でつくった素晴らしい脚本になりました。とても楽しい数か月でした。

初参加

女学生役　及川　楓和（かえな）さん

おじいちゃんに声をかけられて参加しました。緊張したけど練習を重ねて慣れてきて、本番は楽しんで演技できたと思います。

アイ子・マツノ役　鈴木　蘭（らん）さん

第１回で主演を演じて以降、久しぶりの出演です。原作にはない役なので、自分や周りの人たちとイメージをつくりあげました。描かれていない部分も想像しながら楽しんでもらいたいです。